



京都府

## 白瀬美智男さん(田尻)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井  
取材日：6月3日

### 浪江の心や経験を 今の生活に活かしたい・伝えたい

白瀬美智男さんは、妻の優子さん、そして息子の清尉さんとともに京都市の借り上げアパートで生活しています。浪江に居たころ、趣味としていたウォーキングや川柳を活かし、現在の土地で前向きに生きようと心がけています。



私たちは震災後、福島市内や娘宅のあるいわき市を移動し、昨年4月末に府営住宅の空き情報だけを頼りに現在の京都市に移ってきました。文化も風土も異なる初めての土地にきたわけですが、1年以上暮らしているなかで色々な活動にも取り組めるようになりました。1年前の春の桜の花は記憶にないのですが、今年の桜はとても美しく見えました。それだけ、気持ちの整理がついてきたのだなと実感しています。例えば、京都は史跡の豊富なまちということも

あり、現在は史跡案内のNPO団体の会員として活動しています。また、なるべく地域の生活に溶け込もうと自治会活動には積極的に参加しています。今日も草刈りの共同作業をしました。ただ、こちらでは土に触ることがないですね。そんなとき、浪江の生活は本当に豊かなものだったことが思い起こされます。何よりも地域の皆さんのつながりが強いところでした。私の暮らした大堀地区や田尻行政区は、子ども会育成会と連携した行事など、昔からの世代と若い世代が一緒になった地域づくりを行っていました。個人的には、野菜づくりや溪流釣り、パークゴルフやウォーキングなどスポーツに興じたり、楽しい毎日でした。でも、ふり返って悔やんでも、かりいても何も前には進みません。なるべく外に出て歩いたり、活動をしたり、情報を発信したり自分なりに努力しています。そしてこうした京都での生活の原点は、浪江での生活の経験がすべて元になっています。私たちは支えられ、助けられることばかりでなく、浪江の心意気を伝

えることもできると思います。私も浪江の皆さんが元気にやっているという話を聞くことが何よりも喜びですし、勇気をもらうことができます。浪江町への帰還については、家族3人で意見が分かれることもあります。福島から遠い京都に暮らしているため、浪江の皆さんの集まりには気軽に行けないときなどは、申し訳ない気持ちになります。それでも、いまの生活を少しでも活力あるものにするために、前向きに頑張りたいと考えています。「避難」と言いながら、実は私たちの人生にとって大切な時間を費やしているわけですから、少しでもこの時を大切にしたいという思いです。私には浪江町時代に培った豊富な経験と蓄積があるはずですが、そして何よりも浪江町民としての心があります。それぞれ皆バラバラではあるけれど、これまでの蓄積を活かして、そして健康第一に頑張っていくものだと思います。

# 浪江のこころ通信

・第13号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

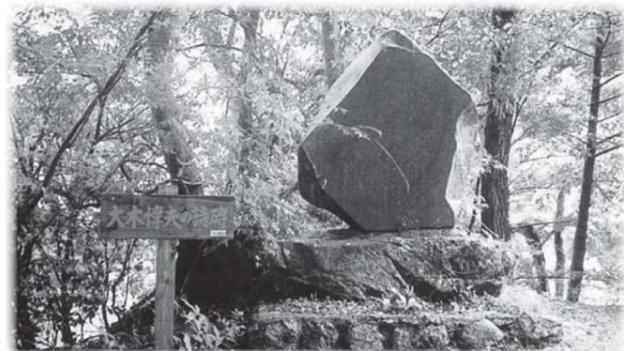
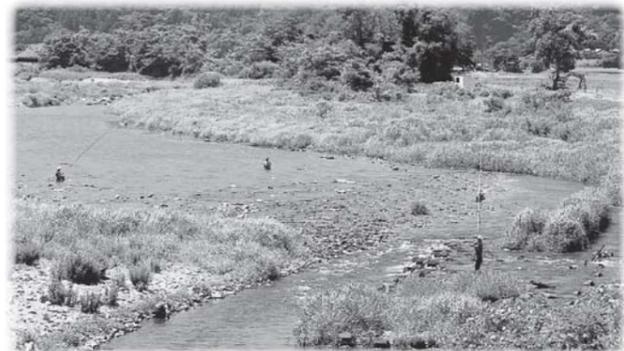
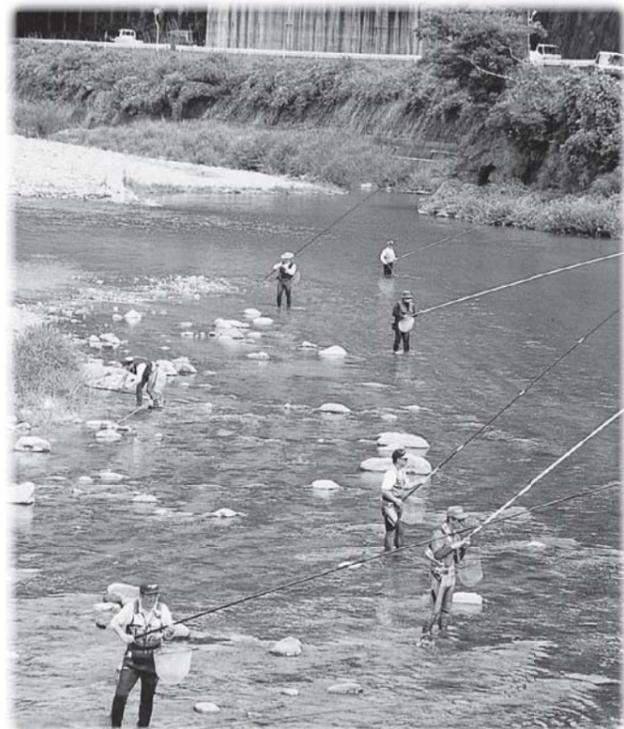
こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

### 「浪江のこころ通信」第13号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒976-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1  
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243-22-4261





## 金澤 崇さん(請戸)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井  
取材日：6月16日

### 今の生活から一步踏み出すために —記憶の中にあるふるさと浪江が心の支えに—

金澤崇さんは、妻の貴世美さんと東京都江東区の借り上げアパートで生活しています。原発・放射線の危険性を考え県外に暮らしています。震災から1年が経ち、被災者としてのこれまでの生活から、一步前に進めなければならぬと考えています。



▲崇さん(左)と貴世美さん

震災によって請戸の自宅は流されましたが、家族が無事であったことが救いでした。親戚を頼り、小高区、相馬市そして東京を転々とし、現在の都営住宅に住むことになりました。知らない土地でしたが、江東区やご近所の方に大変良くしていただきありがたく思っています。東京湾に近いため、船を見かけたり、潮の香りを感じたりすると請戸を思い出してホッとします。正直、若いころは浪江の田舎暮らし

が少し嫌でしたが、こうして離れてみると緑に囲まれた暮らしが本当に懐かしいです。浪江ではあたり前に食べていた魚が、どんなに新鮮だったのか。野菜やお米が本当に豊富だった暮らしを改めて噛みしめています。私たちは、原発や放射線の危険性を第一に考えて、今も県外に暮らしています。まだしばらくはこの暮らしが続くと考えています。ただ、震災当時勤務していた会社が再開していたり、仲間が福島で頑張っていたりする話を聞くともなります。一方で、やむを得ない事情から福島に残って生活している方もいます。それぞれの家族には、それぞれの考えや事情があつて今日を迎えていると思います。それをお互いが尊重して行くことが、私たちに大切なことなのではないでしょうか。むしろ、震災から1年以上が経過すると、自分たちの暮らしを前に進めなければという思いや焦りがあります。しかし、現在の住まいの借り上げ期間が延長になったり、町の復興計画の議論が始まったり

すると、ついつい次の一步を踏み出せずにいる自分を感じます。早く自分の生活拠点をどこにするのかを決め、自分たちの暮らしを進めて行かなければと思っています。少しでもこれらの暮らしを描くため、できるだけ関東地域で開催される町民の交流の場などには参加して、皆さんの声を聞くようにしています。東京に来て、時折会ったり、連絡を取っている浪江の仲間との関係は、今の自分たちを支えています。本当にふるさととは心のより所ですね。浪江があるから今の自分たちがいる。頭の中に鮮明に浮かぶふるさとの風景が心の支えです。自分たちの記憶の中にあるふるさとのおい、音、満天の星空などを、いつか次の世代に伝えたい。県外に暮らす方向性を描きながら、そんな思いも強くしています。何か矛盾していますね。でもきっと、そう思い続けられることが、離れていても町民であり続けることのように思っています。



## 今野 庄治さん(川添)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井  
取材日：6月12日

### まずは家族を大切にすること そしてこれからの浪江町を担う若手を応援したい

今野庄治さんは、妻のますみさん、母のハマさん、娘の里絵さん、そして孫の諒さんと長野市の借り上げアパートで生活しています。家族と一緒に暮らすことを第一に、浪江のころに培った経験を活かして、自立した暮らしを実現することを大切にしています。



▲庄治さん(左)とお孫さんの諒くん

震災後は、郡山市や長男・長女のいる東京などへ移動しましたが、孫の安全と健康のことを最優先に考え、現在の長野市にある県営住宅での生活を始めました。こちらでは、周囲の自治会やサークル団体の方に温かく接していただいています。近所に60坪ほどの畑を借りて、浪江のころのように土に触れながら野菜を作る生活もできています。新潟県まで出かけ大好きな海釣りも続けています。前向きに自立した暮らしを心がけています。

ただ、浪江では行政区長や商工会、そしてロータリークラブなどでも活動していましたので、心残りはありません。地元で今もお頑張っている人たちの思うとき、申し訳ない気持ちや後ろ髪を引かれる思いになります。それでも子どもの安全を第一に、あえてこちらで家族と一緒に生活することを選択しています。町民の中には、仕事の関係で家族がバラバラに暮らす方もいるようですが、私はまず何よりも家族と一緒に暮らすことが大切だと思っています。家族が一緒に暮らし、自立した生活が実現できること。それができて初めて復興に向かえると考えています。町の復興ビジョンでは「町外コミュニティ」や「仮のまち」といった構想があるようですが、人々が集まって支え合う前に、まずはそれぞれの家庭がきちんと自分たちの暮らしを実現できることが必要と思っています。私は、原発のような自然に反する行為や人間が開発するものに以前から疑問を持っていました。浪江・津島で開拓で苦労した両親を見て育ったからでしょ

うか。自然と共に生き、自分の力で切り開く生き方を大切にしてきました。きっと今の暮らし方は、そうしたこれまでの浪江町での経験が支えているのだと思います。過去のことを振り返るよりも、まだまだ見えない先のことを描くよりも、まずは今を精いっぱい生きることが大切だと考えています。同時に、浪江の復興に向けては商工会青年部など、若い人たちにぜひ頑張ってもらいたいです。私たちはきちんと世代交代をして、若い人たちに応援する役割にまわるべきでしょう。震災によって、私たち浪江町民が失いかけた仲間や地域のきずな、そして浪江町としてのつながり。これらを取り戻すためにも、我々、高齢世代が若い世代の考え方を尊重し、若い世代も高齢世代の声を耳を傾ける。そうした世代を超えた連携がこれからの復興に必要なと思っています。



## 亀田 安子さん(権現堂)

取材者：元気玉プロジェクト 榎木  
取材日：6月8日

### 浪江のみんなと手と心を繋いで毎日を元気に

現在は会津若松市館馬町の借上げ住宅で、ペットと一緒にご主人と2人暮らしです。「会津地方なみえ会」の活動を通して、会津地方に避難されている浪江町の皆さんと、コミュニケーションの輪を繋げていきたいと考えていらっしゃいます。



▲ご主人の貢さん、ペットのさくらちゃんと一緒に暮らす安子さん。

浪江町では、仙台屋の屋号で江戸末期から続く家業の販売店を夫婦で経営していました。住まいにしていた古民家を利用し、息子が居酒屋をオープンする予定でしたので、震災のあった当日は、蔵の中を息子と二人で整理していたところでした。幸い蔵の外に出ており、店内にいた主人もけがはありませんでしたが、警察の方たちが「津波が来るから高台へ避難してください」とふれまわっていたので、飼っていた犬・猫を連れ家族3人で、

浪江町では、仙台屋の屋号で江戸末期から続く家業の販売店を夫婦で経営していました。住まいにしていた古民家を利用し、息子が居酒屋をオープンする予定でしたので、震災のあった当日は、蔵の中を息子と二人で整理していたところでした。幸い蔵の外に出ており、店内にいた主人もけがはありませんでしたが、警察の方たちが「津波が来るから高台へ避難してください」とふれまわっていたので、飼っていた犬・猫を連れ家族3人で、

その後、猪苗代町の観光ホテルや、ペンションに2カ月半近くお世話になり、7月16日によくやく現在の家に落ち着くことができました。仕事の関係で、息子とは別々の生活になりましたが、ペット同伴でも住居可能な家を探してくれたおかげで、

「会津地方なみえ会」  
TEL 090-6789-2621



## 添田 隆幸さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：6月12日

### 胸を張って生きて生きたい

福島県の避難所、山形のホテルを経て、2年前まで奥さまの両親が住んでいた街で、奥さまと奥さまのご両親そして愛猫ポルカと暮らしています。

当初、妻と妻の両親、長男の哲平と一緒に、福島の避難所、山形のホテルなどを転々とし、6カ所目に越してきたのは、今年の8月25日です。82歳になる義父は震災当時、南相馬市の病院に入院していました。震災後4日目に、病院から「医師や看護師が不足し薬品も無く治療ができないので、早急に患者を引き取って欲しい。」と連絡がありました。義父の状態は芳しくなく、山形県の各病院に入院を拒否され本当に困り果てました。入院先が見つかるまでということをやっと病院に置いてもらいました。義父が2年前まで住んでいた世田谷区経堂の関東中央病院にお願いして、ようやく転院することができました。救急病院なので、原則3カ月間の入院です。容態は安定して来ましたが、病状の関係で受入れ病院や施設が見つかりません。世田谷区が提供してくれた避難者用住宅での在宅介護も難しく、5カ月後に退院して、民間のマンションでの在宅介護を始めました。

私は浪江町で会社勤めをしていましたが、フランスの音楽院で学び音楽家としての道を歩み始めていた長男と妻の3人で音楽教室を運営していました。自宅兼教室には5台のピアノを置き、4人の講師とともに子どもたちを指導していました。あの震災で、すべてが変わりましたが、おかげさまで全日本ピアノ指導者協会が窓口になり、会員の先生からピアノを譲り受け、妻はこちらでピアノを指導しています。また、出張指導やコンサート審査で不在も多く、私が自宅で義父の介護を担っています。長男は再びウイーンに行き、昨年9月から音楽院に在学しています。来年の春には福島県内のコンサート希望しています。被災地支援のためのチャリティコンサートは数多く開催されますが、被災地で活動していた音楽家のコンサートを応援していただきたいと思っています。



▲左から隆幸さん、義母の文子さん、奥さまの満江さん、義父の秀夫さん

津波で親戚6人が亡くなりました。多くの人がそうであるように、失ったものがあまりに大きすぎます。それでも、生かされていることに感謝し、前向きに明るく生きて行かなければなりません。高齢の妻の両親が「生きていて良かった。」と生涯を

遂げることができるよう、妻がピアノ教師として指導が続けられるよう、そして、長男が音楽家として日本での実績を重ねることができるよう願っています。諦めることもたくさんあります。それでも希望を持ち、胸を張って生きて行きたいと思うのです。



## 志賀 隆充さん(大堀)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・阿部  
取材日：6月12日

### 今までは守っているつもりでしたが、いつもお互いが支え合っていることに気づかされました

昨年3月11日、東日本大震災が発生したときには、富岡消防署での勤務中だったそうです。大堀でもと暮らしていた隆充さんのご両親と子どもたちの4人は、翌朝すぐに本宮市の親戚を頼って避難しました。一方、南相馬市で看護師をしていた奥さんは翌日も勤務だったため、実家の両親とともに避難所で一夜を明かし、子どもたちや家族とは13日に本宮の避難先で合流しました。隆充さんが再び家族に会えたのは19日、8日ぶりでした。現在は、ご両親とは別に親子4人で暮らし、1時間以上をかけて現在の勤務先である榎葉分署に通っていらっしゃいます。



▲ご自宅近くのレストランにて。満面の笑顔は、これからです。

#### ■自分の家族を探す想いを仕事に重ねました

大地震と津波発生当時、勤務していた富岡消防署は停電となり、119番通報も受信できない状態でしたから、署内に指揮本部を立ち上げ、救助活動をしていました。11日からの約1週間、たぶん1時間くらいしか眠っていなかったと思います。翌日12日の明け方からは原発事故や注水に伴うトラブルが相次ぎ、避難誘導の広報活動も行いながら、一人暮らしや寝たきりの方々への搬送なども救急車以外の車も使って対応しました。

ともかく、地域の消防団の方々も原発から避難され、消防と東京電力の関係者しかいなかったわけですから、我々がここを守るといふ想いで、本が一一致団結していたなあと後からつくづく思いました。災害発生から1週間後、交代で休みを取ることになり、富岡町を出て携帯電話の通じる都路村でふと携帯を見ました。すると、家族はもろろん、大学時代の友人や消防学校の同期生、日ごろお付き合いのある方々など、大切に想っている人たちから不在着信や留守電、メールが数え切れないほど入っていました。「空メールでもいいから返事を」というものもあって、運転できないほどに涙があふれました。落ち着いてからですが、子どもたちのリフレッシュのために東京や富山、新潟などへ出かけましたが、訪れる先で触れ合う人たちが本当に優しく、人は人に支えられているのだとつくづく感じました。

父の早い判断が、家族を守ってくれたと思います。大堀相馬焼の窯元をしていた父が、母と子どもたちを連れて12日の1号機爆発の直後に、本宮の親戚を頼って移動してくれました。この判断がなければ、食事も満足になく、厳しい寒さの中、避難所で過ごす必要がなかったでしょう。また、ボランティア活動を希望した父が避難先である本宮市役所に問い合わせに行ったことが縁で、今の借上げ住宅に入居できました。私たちが一時、同じ住宅に住みましたが、水回りが不便なため転居しました。子どもたちの学校環境を変えずにすむのならば、一軒家を借りて再び6人家族で暮らしたいのですが、なかなか適当な住まいが見つかりません。浪江には帰りたい。でも帰れないかもしれないという想いの狭間で心が揺らぎます。特に子どもたちから「いつ帰れる？」と聞かれるとなおさらです。私は、長い時間がかかっても、大堀で前と同じような暮らしに戻りたいと思っています。



## 山田かよ子さん(加倉)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田  
取材日：6月9日

### 帰りたい想いと、現実との間で

県の救護施設「ひまわり荘」に隣り合う自宅に、義母と夫との3人暮らし。3月11日、かよ子さんは自宅の手芸をしており、手掛けていた作品は、今でもその日のまま手元に持っていらっしゃいます。

南相馬市に嫁いだ娘さんご家族はいわき市に、大熊町に住んでいた息子さんたちは会津へと、震災前は近くに住んでいた家族が散り散りとなってしまう、お孫さんたちにもなかなか会えないそうです。

#### ■母と娘、2人の記念のキャンドルを灯して

11日当日、津波が起きたことは防災無線でおぼろげに知りましたが、海岸線から遠くにある自宅には、停電していたものの食料などの備えはあったので、近所の方々と避難せずに過ごしていました。3月14日は私たちの結婚記念日で、その記念のキャンドルと、地震で倒れてきたタンスにしまっていた娘の結婚記念のキャンドルをともに灯しながらの数日間でした。

当時、私たちは原発で起こっている事故はほとんど知らず、2回目の爆発が起きた15日、夫の友人や隣組の方々と早目の夕食を終えたところに自衛隊の方々が来られました。すでに嫁ぎ先の家族と一緒に秋田へ避難していた娘が、私たちの状況を自衛隊に連絡していたそうで、直ぐに帰れるだろうと思いつつ、みんなで東和の体育館に避難しました。無我夢中で家を出たため、私も夫も携帯電話を置き忘れ、子どもたちや親戚、友人たちとの連絡にとても苦労をしたり、自衛隊の車で避難したために自家用車もなく、途方に暮れたり

しました。翌日には木幡住民センターに移り、その後、裏磐梯のペンションで4月から9月まで過ごしました。

この二本松市大平農村広場の仮設住宅は、浪江町に最も近いという理由で選びましたが、昨年の冬はごぼうのような太く、長いつららにびっくりしたり、山間を吹く強風と住宅内の結露にはずいぶん悩まされました。

#### ■帰ることが出来るかもしれない。：わずかな期待が心の支え

大地震で家のぐしは壊れ、玄関も2階も雨漏りがひどく、庭は荒れ放題です。一時帰宅のたびに、朽ちていく家を見ては悲しい思いをしています。浪江に帰ることが出来るならば、私たちがのようにつてのない者には大工さんや屋根屋さんを捜すことは困難だと思いますので、自宅ですぐに生活ができるよう、せめて屋根の修理や庭の草刈りなどの手配を国や町にお願いしたいです。

私は長年、手芸に親しんでいます。震災前日の3月10日、町の広報紙担当の方が5月に掲載する予定で、座敷いっぱい並べ



▲夫 仁さんと一緒に、作品を手にして。

べた作品を撮影してくださいました。その写真は、今では私の一番の宝物です。また、2月に取材を受けたNHK「すてきにハンドメイド」の放映は避難先で観ました。叶うならば、自宅でも以前のように作品作りを楽しんだり、時にはお教えしたりしたいです。夫と2人、帰町へのあわい期待とふるさとへの愛着を抱きつつ、一日も早い結論を今か今かと待つ毎日を送っています。



### 福島民謡語り部 吉川 裕子さん(権現堂)

取材者：きょうとNPOセンター 田口  
取材日：6月10日

#### ふるさとを語り継ぎ、ふるさとの絆をつないでいきたい



吉川さんは、震災直後に大阪に避難して以来、ふるさとの浪江町・福島を想い、近畿圏や関西圏各地で、福島の民謡と自身の被災体験を伝える「語り部」としての活動を精力的に続けています。また、近隣に避難している被災者に対してもさまざまな情報を送り続け、自らコミュニケーションの機会をつくるなど、ふるさとの絆をつないでこられました。



講演先の島根県の方から送られてきた手作品です。

生まれ育った土地：浪江町には、たくさん思い出が詰まっています。私自身と家族の歴史があり、ドラマがあります。浪江町はのどかで食べ物おいしく、人情の厚い場所。生きていくには最高のところ。震災後、大阪に来てからは、「語り部」として福島の民謡を伝える活動だけでなく、被災時のことを方言で話す講演活動も続けています。講演回数は100回を超えました。また、被災者同士が助け合うための支援活動の代表もつとめてきました。

震災の日から1年以上経過した今、被災者や被災地に対する社会全体の意識が薄れてきていることも感じています。心ない言動に傷つくこともあり。昨年、谷村新司さんのコンサートに招待されたとき、コンサート終了後、別室に集まった私たち被災者に向けて、谷村さんが「一緒にがんばりましょう」という言葉をかけてくれました。「がんばってください」という言葉ではなく、「一緒に」と言ってもらったことが本心にうれしかった。そしてみんなで童謡『ふるさと』を歌い、泣きました。今の一番の希望は、「一晩でいいから、浪江町に戻って自分の布団の中で大の字になって寝たい」ということ。ご先祖さまのお墓参りをしたり、運営をしていた託児所ベビーハウスピノキオに通っていた子どもたちにも会いたいです。家族が年に数回集まる場所：ふるさとが恋しい。でも、希望を失ってはいけません。後悔しない人生を生き抜きたい。これからは私に伝えられることを一杯伝えていきたいと思っています。



### 小野田真仁さん・祥子さん(権現堂)

取材者：NPO法人まちなか研究所わくわく 宮道・下地  
取材日：6月6日

#### また両親、兄弟、従兄みんなで集まりたい

浪江町で生まれ育った小野田さんご夫妻。権現堂字南深町では、美容室「SWORD」を経営。昨年6月6日に沖縄へ渡り、現在は与那原町で家族4人で生活をしています。

■子どもの環境に良い沖縄へ  
沖縄で生活をスタートさせたのは、子どもがまだ小さいので原発から一番遠い沖縄なら安心と思っただけです。震災後は、一度新潟県へ避難し、その後福島県に戻り生活していましたが、どうしても「歯みがきする水は大丈夫?」「お風呂の水は本当に安全?」と思っただけで、毎日不安な毎日でした。土地勘も身内もない沖縄で生活をすることは勇気が必要でしたが、夫婦で話をして沖縄に行くことを決めました。  
沖縄では、職場の方も保育園の先生方も私たちが「被災者」ではなく、同じ「ウチナンチュ(沖縄人)」のように対等に接してくれるので、すごく心地がいいです。子どもにもたくさん友だちができて、近くの公園で遊ぶこともできて、子どもにとってすごくしやすい環境です。  
■浪江に戻れるなら普通のこと  
浪江にいても食べたくなるのは、なみえ焼そば。麺が太く味が濃くて、子どもも大好きです。焼きそばを食べるに「松乃家」や「縄のれん」にはよく行きました。また行きたいですね。  
浪江にいたころは、シヨッピン

グセンターの「サンプラザ」にもよく行きました。ママ友と行ってお茶を飲みながらおしゃべりをしていました。今でも浪江の友だちと「サンプラザ行きたいね。」と話しています。浪江に戻れるなら、そんな普通の日常のことがしたいです。  
■永住の地を決める難しさ  
浪江では、2010年12月に美容室をオープンさせ経営していましたが。今も、常連のお客さんが髪のお手入れができていくか、自分にあつた新しい美容室を探しているか気になります。でも一方で、私たちの店のことも忘れてほしくないという思いもあり複雑です。震災後、お店も家も大きな崩れはなく、震災前の状態のままです。戻ってお店を再開させたいですが、警戒区域で戻れません。でも、もし警戒区域が解除されたとしても、本当に戻って大丈夫なのかとも思っています。浪江で生まれ育ち、浪江が大好きですが、子どもや家族の安全が第一です。震災前までは、浪江が永住の地だと当然のように思っていました。お店も開業してこれで生計を立ててやっていたことと決めていたのに。1年経ち、前に進まないといけないわかってはいますが、踏ん切りがつか



▲小野田さんご一家。祥子さん(左上)、真仁さん(右上)、優ちゃん(左下)、佳桜ちゃん(右下)

ず、永住の地を決めることは簡単ではありません。  
■両親、兄弟、みんなに会いたい  
浪江にいたころは、両親、兄弟、祖父母、従兄など親戚が近くに住んでいました。誕生日を迎える人がいれば、祖父母の家に集まりお祝いをするなど、祝いやクリスマス、正月、何かあるたびに親戚が自然と集まって一緒に時間を過ごしました。以前は会いたくときにすぐに会えたのに、今は福島、茨城、埼玉などみんなバラバラでなかなか会えなくさみしいです。両親、兄弟、従兄みんなにはいつでも会いたい。また昔のようにみんなで集まりたいです。